

「松江が生んだ美術史家・相見香雨～九州大学文学部所蔵『自筆調査録』展」実施報告

桑原羊次郎・相見香雨研究会
代表 村角紀子

註：本稿は、先に関係者に配布した当該展覧会報告書（私家版、A4版16頁、100部印刷、2016年10月刊）の原稿を改稿したものである。

1. 実施報告

本展は、桑原羊次郎・相見香雨研究会が公益財団法人いづも財団の助成を得て行った事業「『相見香雨自筆調査録』の研究と紹介」の成果である。本事業では、鳥根県松江市出身の美術史家・相見香雨（繁一、1874～1970）が60年近くにわたって書き継いだ「相見香雨自筆調査録」（国立大学法人九州大学文学部所蔵、全42巻240冊）を松江に移送して調査と撮影を行い、その過程で明らかとなった成果を地元で初めて展示・紹介した。本展の実施報告は以下の通りである。

なお、原資料借用にあたっては九州大学附属図書館より、借用中の資料保全と調査撮影にあたっては鳥根県立美術館より多大なご協力を得た。筑波大学附属図書館、鳥根県立美術館には展示用図書の利用や解説パネル等の準備にあたってご助力を得た。また、原資料の情報提供と調査方針の検討にあたっては中野三敏先生、玉蟲敏子先生よりご助言を賜り、相見香雨著作権者である関聡子氏には本事業の準備段階から全面的にご協力をいただいた。諸氏に深く感謝の意を申し上げる。

1.1 概要

- ・ 名 称：松江が生んだ美術史家・相見香雨
～九州大学文学部所蔵「自筆調査録」展
- ・ 会 期：2016（平成28）年7月11日（月）～31日（日）
※会期中無休、20日間

- ・場 所：島根大学附属図書館 1F展示室
(〒690-8504 島根県松江市西川津町1060)
- ・開催時間：平日 8：30～21：30、土日祝10：00～17：30
※ 7/23・24・30・31は 9：00～21：00
- ・入 場 料：無 料
- ・主 催：桑原羊次郎・相見香雨研究会、島根大学附属図書館
- ・協 力：九州大学附属図書館

1.2 実施経緯

2015年	11月27日	九州大学文系合同図書室より「自筆調査録」を借用搬出 ※輸送は往復とも(株)日本通運「貴重品輸送」を利用
	11月30日	島根大学附属図書館に搬入
	12月4日	同館保存処理室で燻蒸(脱酸素、～17日終了)
2016年	1月4日	同館作業ラボにて第1帙より順次デジタルカメラで撮影開始
	4月7日	撮影終了(以後、データ確認のうえ8月7日まで追加撮影実施)
	5月20日	同館作業ラボにて内容調査、採寸
	7月6日	筑波大学附属図書館より展示用図書『罹災美術品目録』郵送受取
	7月8日	同館1F展示室にて展示作業
	7月11日	展示会開始(～31日まで)
	7月20日	展示解説①(担当：村角紀子、林みちこ)
	7月30日	展示解説②(担当：村角紀子、藤間 寛)
	8月1日	撤収
	8月2日	筑波大学附属図書館へ『罹災美術品目録』郵送返却
	8月17日	「自筆調査録」梱包搬出
	8月19日	九州大学文系合同図書室へ「自筆調査録」返却終了
	8月26日	画像データの整理終了
	9月15日	画像データ・目録を九州大学・島根大学・遺族へ提出完了

1.3 展示構成

展示は大きく3部構成とし、内容は以下の通りとした(詳細は後掲の展示解説、出品リストも参照)。

導入

- (1) ごあいさつ～相見香雨とは (担当：村角紀子)
- (2) 「自筆調査録」とは (村角)

1. 自筆調査録より

- (1) 相見香雨のライフワーク「琳派」 (大森拓土)
- (2) 郷土ゆかりの美術鑑賞記～松平家、八重垣神社～ (藤間 寛)
- (3) 美術サークル「審美会」の活動 (藤間)
- (4) 1910年日英博覧会と相見香雨
～審美書院の出店と『特別保護建造物及国宝帖』 (林みちこ)
- (5) 関東大震災と『罹災美術品目録』 (村角)

2. 「相見香雨自筆調査録」の全容

3. 相見香雨の著作

資料パネル

- (1) 相見香雨年譜・著作一覧 (村角)
- (2) 松江から見た相見香雨
～「相見香雨翁を語る」(『島根新聞』掲載座談会記事)

参考図書

大型ディスプレイ～「自筆調査録」デジタル画像

(上記1. で展示した巻号について全画像を公開)

1.4 印刷物

- ・ポスター A 2 版 2 枚 (島根大学学内掲示)
- ・チラシ A 4 版両面フルカラー 500枚配布
- ・出品リスト A 4 版 300枚会場配置

1.5 広報、取材等

- ・島根大学、同附属図書館 HP掲載
- ・『山陰中央新報』 イベント告知欄、7月10日、11日、26日掲載
- ・山陰ケーブルビジョン 7月11日17:00～ (ニュース内放映、以後同内容を複数回)

1.6 来場者

- ・総入場者数：300人 (推計)
- ・展示解説聴講者数

① 7月20日（水）午後2時～ 8名

② 7月30日（土）午後2時～ 5名

・アンケート回答者数

・シール式 46名（法文学部6名、教育学部4名、生物資源科学部4名、学外32名）

・記述式 7名（年代：10代 3名、20代・50代・60代・80代 各1名）

コメント：

- ・きっと本人は何気なくしたためにおられたものが歴史となって残っていてすごいなと思いました。私も何か書こうと思います。（10代、出雲市）
- ・貴重な当時の資料を見ることができてよかった。（10代、島根大学学生）
- ・今まで相見香雨さんのことは全く知りませんでした。この展示会で知るきっかけとなり良かったです。今回は初の展示ということで、もっと色々な所でも展示してほしいと思います。（20代、同上）
- ・研究成果の展示として重要です。是非、さらなる研究の成果を企画されてください。（50代、福岡県）
- ・相見香雨について見識がなかったので興味深かったです。娘の関高子氏についての随想集も興味深く、読んでみたいと思いました。（60代、松江市）
- ・2018年不昧没後200年展に関連非常に高く全くタイムリーと云いましょうか。もっともっと一般の方への周知方を宜敷願います。（80代、松江市）

1.7 成果報告

1.7.1 来場者について

入場総数は約300人と推計した。入場無料で出入自由としたため正確な数は不明だが、シール式アンケートの回答状況や、主催者が会期中会場内を確認した際の様子から、最終的に1日平均15名程度×会期20日間とした。学外広報はやや不足気味だったと思われるが、地元紙のイベント告知欄の掲載や地元ケーブルテレビのニュース放映が複数回あり、地域の方に多く足を運ん

でいただくことができた。

シール式アンケートの結果に拠れば、来場者は学内よりも学外から訪れる方が際立って多く見られた。記述式アンケートの回答を見ると、図書館利用や受講目的で偶然立ち寄った方は相見香雨の存在を初めて知ったというコメントが多く、テレビやチラシを見て来場した場合はもともと相見について知識を持っていた傾向が見られた。また、展示解説には両日とも40～80代前後で郷土史に強い関心を持った方が多く参加され、熱心な質問が相次いだ。

相見や「審美会」（相見の松江疎開中開かれた美術鑑賞サークル）にゆかりの深い方が多く来場したのも特徴である。来場した関係者から、主催者が会場で直接、資料の記載内容について新知見をうかがう機会にも恵まれた。資料パネルの座談会記事や年譜を熟読し、旧知の名に楽しげにコメントを加えるなど、相見の出身地ならではの姿がしばしば見られた。

また、県外研究者の関心も高く、本資料と同様に美術史家・土居次義の調査ノートを一括保存している京都工芸繊維大学から多田羅多起子氏が観覧され、最終日には「自筆調査録」の保管責任者である九州大学・井手誠之輔先生が観覧された。

1.7.2 展示成果と課題について

本展の成果としては、第一に、相見香雨という美術史家の存在を出身地・松江にあらためて紹介できたことが挙げられる。相見は30代で上京して業績を積み、最後も東京で没しており、現在の地元での知名度は全国区のそれに比してむしろ低いと言わざるを得ない。このため本展の構成にあたっては、「自筆調査録」の単なる調査報告にとどまらず、相見の基本的な人物像、代表的な研究業績に加え、地元ゆかりのエピソードを紹介するよう配慮した。上掲の記述式アンケートのコメントからは、相見を初めて知った方に関心を持てただけの様子がかがえ、この方針は成功したと言える。また、展示解説の聴講者の感想を聞くと、もともと相見について知識を持っていた地域の方にも満足いただける内容となったと思われる。会期終了後、『山陰中央新報』に市民の投稿「誇らしく思う相見氏の業績」が掲載された。

第二に、「自筆調査録」のデジタル画像化による研究の大幅な進展である。全42帙の撮影を概ね計画通り完了し、その画像を研究会メンバーで分担して

詳しく検証できた意義は大きい。個々の研究成果は本展第1部で5つのテーマ別に紹介したが、例として、最終年記の確認を挙げておきたい。本資料の記録開始が第1帙第1冊冒頭の1909（明治42）年8月2日からであることは明らかだったが、各冊の記述形式が不統一で年代が入り組んでいるため、最後については判然としていなかった。今回、全画像を通覧しデータを目録化することで、最も新しい年記が第37帙第5冊の日記にある1967（昭和42）年7月16日であることが明らかとなった。本展ではこの成果を導入解説に取り入れると同時に、第2部で最初と最後のノートとを並べて展示し、本資料に費やされた歳月を視覚的に示すことができた。また、第1部に展示したノート全体のデジタル画像を大型ディスプレイで公開し、展示頁以外も閲覧できるようにした。これは来場者に好評であり、画面操作上の改善点が確認できるなど、将来的に全画像をデータベース上で公開するテストとしても有効であった。

第三に、今後の研究の方向性を明確にできたことを挙げたい。本事業開始当初、本研究会メンバーの多くは相見の研究対象と人的ネットワークの多様性に戸惑い、かつ、彼の評価基準にはジャンル・時代・様式といった従来の美術史の枠組みや制度論では捉えきれない要素が絡んでいるという感触を持っていた。今回、「自筆調査録」を実際に閲覧し、また展示中に県内外の来場者から見解をうかがう機会を持ったことで、その多様性を読み解くコードは、やはり近世からの連続性を持った地域独自の特性にあるのではないかという示唆を得た。この〈ローカル・コンテクスト〉というべき視点を明確にできたことは、相見に加え桑原羊次郎を対象とする本研究会にとって大きな収穫であった。

今後の課題としては、「自筆調査録」テキストの精読があげられる。本展準備にあたっては時間の制約から、相見の年譜と著作一覧をもとにあらかじめテーマを設定し、該当する年代のノートに目的の記述を探す、という手順で調査を進めた（例えば、『罹災美術品目録』関連の記述を探して関東大震災後のノートをたどる等）。このため、虚心に調査録自体を読みこみ、既存の文献にない新事実を発見する、ということには及んでいない。これは時間をかけて取り組んでいきたい。

最後に、本研究会では今後も調査研究を進め、桑原羊次郎生誕150年にあ

たる2018年に小企画展、相見香雨没後50年にあたる2020年に企画展とシンポジウムの開催を計画している。本展はその試行段階として、各機関の協力を得て企画・広報・展示を進める非常に良い機会ともなった。関係諸氏に感謝の意を申し上げたい。

【桑原羊次郎・相見香雨研究会 メンバー一覧】

代表 村角 紀子（松江市史料編纂課専門調査員）

副代表 藤間 寛（島根県立美術館学芸専門官、松江歴史館学芸専門監）

林 みちこ（島根大学嘱託講師、日本学術振興会特別研究員）

小林奈緒子（島根大学附属図書館事務職員）

大森 拓土（島根県立美術館主任学芸員）

西島 太郎（松江歴史館専門学芸員）



2015年11月27日 九州大学文系合同
図書室より借用搬出



12月4～17日 島根大学附属図書館
にて燻蒸



2016年1月4日～ 同館作業ラボに
て撮影開始



5月20日 作業ラボにて内容調査と
採寸



7月11～31日 島根大学附属図書館
展示室にて展示会開催



会場入口付近



導入パネル



1. 自筆調査録より



(1) 相見香雨のライフワーク「琳派」



(2) 郷土ゆかりの美術鑑賞記、(3) 審
美会の活動



(4) 日英博覧会、(5)『罹災美術品目録』



2. 自筆調査録の全容



3. 相見香雨の著作



大型ディスプレイでのデジタル画像公開



7月20日 展示解説



2. 展示解説・資料 (抜粋)

2.1 導入

2.1.1 ごあいさつ

本展は、松江市出身の美術史家・相見香雨（繁一、1874～1970）が60年近くにわたって書き継いだ「相見香雨自筆調査録」（九州大学文学部所蔵）を地元で初めて展示、紹介するものです。

相見は1874（明治7）年松江市魚町に生まれ、鳥根県尋常中学校でラフカディオ・ハーンに英語を学んだ後、東京専門学校（現・早稲田大学）に進学します。1901（明治34）年に帰松して『松陽新報』（現『山陰中央新報』）創刊と同時に編集者となり、その後、1907（明治40）年頃に再上京して著名な美術専門出版社・審美書院で美術書編纂に従事。1910（明治43）年にロンドンで開催された日英博覧会では同社出店のために渡欧し、欧州各地を歴訪して美術視察を行いました。帰国後、琳派研究を中心に「抱一上人年譜稿」（1927年刊）ほか多数の論考・著作を発表。在野の立場で優れた研究を続け、1952（昭和27）年に78歳で文化財保護委員に就任しました。その後も96歳で歿するまで日本美術史研究の進展に重要な足跡を多数残していますが、今日では地元でもその名を知る人が少なくなっています。

今回は「相見香雨自筆調査録」から、琳派研究など代表的な日本美術調査記録、雲州松平家や八重垣神社など地元ゆかりの名品鑑賞記、そして松江に疎開し地元有志と美術サークル「審美会」を主催していた1940～50年代の日記などを、関連資料とあわせて展示します。そのほか『雲州餘彩』（1922年刊）をはじめ相見の貴重な著作を多数紹介しています。なお、本展は島根在住の研究者有志6名によって構成する「桑原羊次郎・相見香雨研究会」が2014（平成26）年より行ってきた研究成果によるものであり、資料借用にあたっては九州大学附属図書館、調査撮影については島根大学附属図書館より多大なご協力を得ました。また、本事業は公益財団法人いづも財団の助成をいただき



相見香雨 肖像

ました。最後に、開催にあたってご助力を賜りました島根県立美術館、筑波大学中央図書館をはじめ関係各位に心よりお礼申し上げます。

2016年7月

桑原羊次郎・相見香雨研究会

2.1.2 「相見香雨自筆調査録」とは

「相見香雨自筆調査録」は、相見が審美書院で調査助手を始めた30代から、紫綬褒章を受章し美術史界の大家となった90代まで、戦禍を挟んでなお絶えることなく書き継がれた全42帙240冊（ノート230冊、手帖10冊）にのぼる日本美術の調査記録です。

相見は1907（明治40）年暮、松江の『松陽新報』編集者を辞して上京。翌年、審美書院に入社し、美術史研究者としての第一歩を踏み出しました。「自筆調査録」第1帙第1冊は、入社翌年の1909（明治42）年8月2日、奥絵師の狩野四家のひとつであった中橋狩野家訪問の記録から始まっています。これは当時、同社で大村西崖が編纂を進め、相見が助手を務めていた『東洋美術大観』日本絵画篇の関連調査と考えられます。相見はこの時35歳。以後、「自筆調査録」には名家や寺社での作品鑑賞記、入札会の覚書き、画家の墓碑や過去帳の調査記録、文献の抄録などが連綿と綴られていくことになります。

そして「自筆調査録」で年記を確認できる最後の記録は、第37帙第5冊に残された1967（昭和42）年7月16日の日記です。92歳となり、公的に論文を



「相見香雨自筆調査録」全42帙240冊
国立大学法人九州大学文学部所蔵

発表したのもこの年1月が最後でした。本資料は、まさに相見の研究活動の出発から終焉までが手にとるように分かる史料と言えるでしょう。

1970(昭和45)年に相見が96歳で亡くなった後、本資料は、東京都北区滝野川の自宅「飛鳥山房」の夫人の元に残されました。その後1984(昭和59)年、相見の絵本研究に私淑した近世文学研究者・中野三敏氏の仲介により、同氏が文学部教授を務めていた九州大学(福岡市箱崎区)へ旧蔵書の一部とともに寄贈。現在、「相見文庫」として同大文系合同図書室に収蔵されています。貴重な和漢籍が数多く含まれる旧蔵書は研究用として広く閲覧に供されてきましたが、本資料については外部に情報が公開されることはなく、この度の展示会が初公開となります。

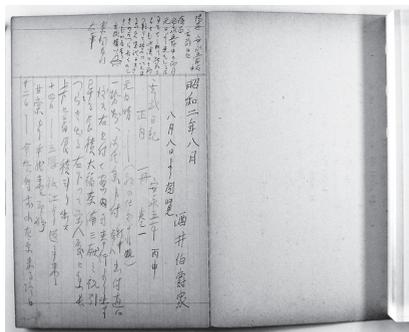
2.2 自筆調査録より

2.2.1 相見香雨のライフワーク「琳派」

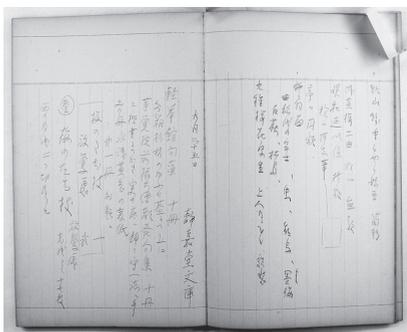
相見香雨は美術叢書の編集や監修、著作や論文の執筆を数多く手がけ、その研究領域は、宋・元代の中国絵画、室町・桃山期の水墨画、江戸期の文人画、琳派、復古大和絵(この呼称は相見による)、浮世絵、版本・絵本類など多岐にわたっている。その中でも「琳派」の研究は相見のライフワークであった。

“光琳派”の絵画を収録した『東洋美術大観』第五冊(審美書院、1909年)の編集にはじまり、相見は晩年まで精力的に研究成果を発表し続けた。その対象は本阿弥光悦、俵屋宗達、尾形光琳、尾形乾山、酒井抱一を中心に、喜多川相説、渡辺始興、深江蘆舟など、現在「琳派」で括られる画家の多くを網羅しており、その後の琳派研究における基礎文献となった論考も少なくない。

例えば、「抱一上人年譜稿」(『日本美術協会報告』6、1927年)は『玄武日記』、『摘古探要』、『軽拳館句藻』などの一次資料に依拠して編まれた詳細な年譜で、抱一研究の基礎文献となった。また「宗達の仙仏画と『仙仏奇踪』」(『大和文華』8、1952年)は、宗達派による水墨人物図のイメージソースが明代末の書『仙仏奇踪』内の図様であることを解明した重要な論考である。他にも、それまで伝記不明であった深江蘆舟の墓と過去帳の発見を機に、蘆舟の琳派内での位置づけを考証した「深江蘆舟の墳墓発見をめぐって」(『大和文



「相見香雨自筆調査録」11-2
1927年8月8日



同 11-4 1927年9月25日

華』31、1959年）も相見の業績として知られている。

このような琳派研究の中で、相見が数多くの新出作品や資料を積極的に紹介したことも注目される。旧大名家や財閥の名士、地方の素封家らが秘蔵する名品を世に開陳した功績は大きく、後の美術史研究の礎となっている。「自筆調査録」は、そうした相見の研究活動を端的に示す調査・鑑賞記録である。相見の研究過程、交友関係、記録時における作品の所在や伝来等が分かる貴重な資料であると共に、日本美術史学の黎明期の様相を知る上でも格好の資料といえるだろう。

(大森 拓土)

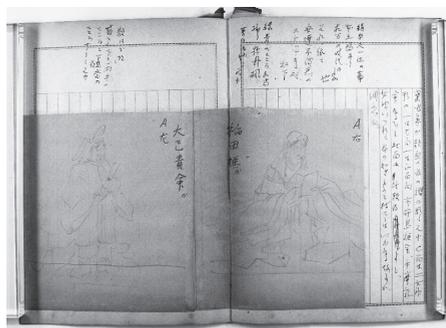
2.2.2 郷土ゆかりの美術鑑賞記～松平家、八重垣神社～

相見香雨は、日米戦争により東京の空襲が激しくなったため、1945（昭和20）年7月5日に松江に帰郷した。はじめ市内雑賀町にあった三島家の別荘に入り、半年後に松陽新報時代の同僚・吉田行精が住職を務める奥谷町の真光寺の離れの二階に移り、1951（昭和26）年3月10日に再上京するまで5年8ヶ月にわたって疎開生活を送った。

この間、相見は山陰各地に出向いて美術品の調査を積極的に行い、また鑑定依頼も多々あり、一方では購入もしている。「自筆調査録」の記録には、作者、作品名などの最小限の記載しかなく、作品の印象やスケッチ、判定評価はほとんど記されていない。しかしこの記録から松江藩内に美術文化が栄えた状



「相見香雨自筆調査録」14-1
1929年



同 28-7 1949年4月23日

況を紐解くことができる。

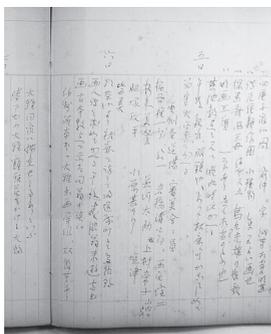
膨大な調査記録の中で注目されるのは、松平家と八重垣神社の記録である。松平家は1929（昭和4）年に行われ現在の国宝や重文作品の内容や寸法、付属品までが詳しく記載され、八重垣神社は1949（昭和24）年の壁画の調査後、重要文化財の指定に導いた。

（藤間 寛）

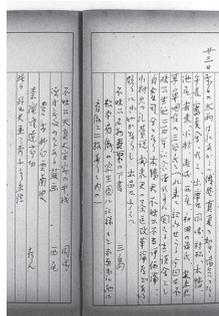
2.2.3 美術サークル「審美会」の活動

相見香雨は、市内旧家の出身で『松陽新報』を創刊した衆議院議員の岡崎運兵衛と縁戚にあたり、実父の没後同家に寄寓、『松陽新報』入社後次第に古美術に興味を持ったという。相見の疎開中の活動で注目されるのは、松江市内を中心にした出雲地方の古美術調査と、美術愛好家のための「審美会」を行ったことである。

「審美会」は相見の解説による近世の書画を主とした勉強会で、戦後の厳しいインフレの時期にあって1945（昭和20）年11月5日に雲州茶道場（三島家）で最初に開催され、梶谷種一郎、公一、岩橋清四郎、西尾隆二、安来美登、並河太助、上村常子、肥塚政平、小原甚太郎、塩津、皆美などの諸氏が参加している。次いで半月後の11月17日に開き、翌年からは2月17日以降ほぼ毎月催された。会では相見や会員の所蔵品を出陳して評論を行い、参加者の顔ぶれや人数、作品数などは会によりまちまちで比較的自由な雰囲気であった。



「相見香雨自筆調査録」27-3
1945年11月5日



同 29-3 1950年6月23日

1950(昭和25)年6月23日の審美会では、岡崎、村松、木幡、池尻、安来、小村、瀬崎、西尾、和田、三谷が参加し、不昧公生誕二百年記念行事の座談会が行われている。そのほか調査録には郷土の美術研究や指導者として活躍した桑原羊次郎や太田直行、美術家では平塚運一、石橋和訓などの名があり、幅広い交流の跡が知られる。

(藤間 寛)

2.2.4 1910年日英博覧会と相見香雨～審美書院の書店と『特別保護建造物及国宝帖』

1910(明治43)年5月14日から10月29日までの5カ月間、ロンドン西部のシェパーズブッシュに設けられた博覧会場「ホワイトシティ」で開催された日英博覧会(Japan-British Exhibition)は、総入場者835万人を迎えた日英二国間の国家的ページェントであった。この博覧会は1902(明治35)年に締結された日英同盟の継続更新に際し、両国の友好関係を強化するために企画されたものであり、日本が西欧列強と肩を並べる「一等国」であることをアピールしようと日本政府は出品物を厳選した。

さまざまなパヴィリオンの中でも見どころとなったのが日本の美術展示で、30点余りの国宝が海を渡りロンドンで展示された。併せて内務省宗教局の編集で約520点の図版と解説を収録した『特別保護建造物及国宝帖』が日本語・英語の両言語で同時出版されることとなり、その印刷を審美書院が担

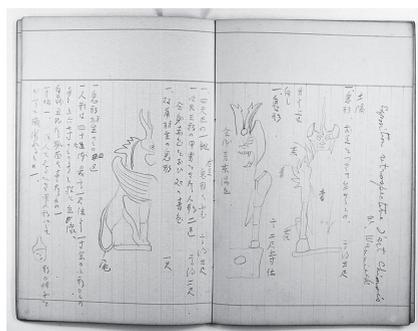


日英博覧会会場の様子（日本の歴史ジオラマ展示）

Hammersmith and Fulham Archives and Local History Centre蔵



審美書院の出版に関する広告
Official Guidebook より



「相見香雨自筆調査録」1-4
1911年6月22日

うこととなった。「彫刻、絵画及巧藝」の解説を岡倉覚三（天心）が執筆したこの国宝帖は、美術史学において「第二の官製日本美術史」と評価される重要な文献であるが、その編集を担当したのが相見香雨であった。

日英博には審美書院も出店し、主幹の田島志一と相見らが指揮のためロンドンに渡った。博覧会終了後は『国宝帖』のみならず、それまでに出版した豪華美術書を携えてドイツ、フランスの各地を巡回し、各地の美術館・博物館にそれらを寄贈するとともに販促活動を行った。こうして美術愛好家の手にわたった審美書院の書籍が欧州のジャポニスムに与えた影響は大きい。

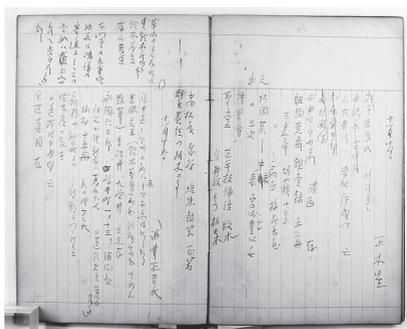
（林 みちこ）

2.2.5 関東大震災と『罹災美術品目録』

1923（大正12）年9月1日午前11時58分、相模湾北部を震源とするM7.9の巨大地震が発生。関東地方全域でM7を超える大規模な余震が翌日夕方まで続いた。さらに地震後、各地から出た火は折からの強風にあおられて瞬く間に広がり、旧東京市内の約40万棟が全焼。関東地方で190万人が被災、10万5千人余が死亡あるいは行方不明になったとされる。

この関東大震災では、東京近郊の旧家、新興財閥、寺社、官公庁などあらゆる種類の美術品所蔵者が被災し、どれだけの美術品が焼失したのかさえ不明という事態となった。美術愛好家の団体「國華俱樂部」会長で東京美術学校校長であった正木直彦（1862～1940）はこれを深く嘆き、震災直後、旧知の相見香雨に罹災美術品の調査を委嘱した。以来、相見は1925（大正14）年まで東京市内外で調査を続け、訪問先はあわせて269カ所に及んだ。この膨大な調査記録『罹災美術品目録』が刊行されたのは1933（昭和8）年8月のことである。

震災後の混乱が続く中、文献もなく関係者の記憶を頼りに進めた当時の調査の様子について、相見は同書凡例で「…幾百千の多蔵家はその主要品のみにも、之を想起すること易しからず、又半焼の家にてはその存亡の明かならざるものあり、又甚だしきは一家族全滅して、之を問ふによしなく、僅に他方面より探知したる所もありき」と生々しく伝えている。



「相見香雨自筆調査録」7-2表紙 および 同本文 1923年11月14日

「自筆調査録」にも、この罹災調査の過程を見出すことが出来る。1923(大正12)年11月からは連日のように所蔵者の名前が記され、そこで確認した美術品の項目には「亡」や「存」、あるいは「全焼」といった語句が書き加えられている。「自筆調査録」には1909(明治42)年以来、職業的に美術鑑賞記が綴られていたが、震災後、その記録は各家から何が失われてしまったのかを検証するための原簿の役割をも果たしたといえるだろう。

(村角 紀子)

2.3 資料パネル

2.3.1 松江から見た相見香雨

1962(昭和37)年7月21~23日、『島根新聞』文化欄に「相見香雨翁を語る(上)(中)(下)」という記事が掲載された。前年の相見の紫綬褒章受章と同年に迎える米寿を祝し、かねて地元で相見の指導を受けた「郷党」が功績をたたえるために催した座談会の様子である。相見の美術研究の経緯について、地元ならではの知見や意外な素顔が語られる興味深い記事となっている。

司会は宍道町八雲本陣主で美術収集家の木幡久右衛門が務め、松江市内外から相見と縁の深い作家、美術コレクター、古美術商など17名が集った。出



「相見香雨翁を語る(上)(中)(下)」『島根新聞』1962年7月21~23日より
(原本：島根県立図書館郷土資料室蔵)

席者は以下の通り。岡崎信之（市内堅町：相見香雨の縁者）、高井敬正（同石橋町）、塩津正寿（同魚町：彫金家・美術研究家）、安来美登（同本郷町：材木商、美術収集家）、河合忠親（同雑賀町）、本間正夫（同北田町）、森山時雄（同石橋町：醸造業、美術収集家）、本間治夫（同苧町）、金川得助（同寺町：美術商）、小村元太郎（同末次本町：繊維業、美術収集家）、一瀬武夫（八束郡東出雲町）、藤原悦子（松江市大正町）、山本乙介（同殿町：美術商）、米田順市（同）、安達不伝（同西津田町：日本画家）、下山博敬（同人参方）、佐藤宗紹（同寺町：龍覚寺住職）。

2.4 出品リスト

題 名	年 代	所 蔵 者
1. 自筆調査録より		
(1) 相見香雨のライフワーク「琳派」		
「相見香雨自筆調査録」11-2	1927年 8月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」11-4	1927年 9月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」11-5	1927年10月	九州大学文学部蔵
「抱一上人年譜稿」『抱一上人』 (日本美術協会報告6)	1927年	個人蔵
(2) 郷土ゆかりの美術鑑賞記～松平家、八重垣神社～		
「相見香雨自筆調査録」14-1	1929年 2～3月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」28-7	1949年 2～4月	九州大学文学部蔵
(3) 美術サークル「審美会」の活動		
「相見香雨自筆調査録」27-3	1945年 4月～1946年 5月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」29-3	1950年 5～7月	九州大学文学部蔵
(4) 1910年日英博覧会と相見香雨～審美書院の outlet と『特別保護建造物及国宝帖』		
「相見香雨自筆調査録」1-4	1909年11月～1911年 7月	九州大学文学部蔵
内務省宗教局編『特別保護建造物及国宝帖』（審美書院）	1910年	個人蔵
(5) 関東大震災と『罹災美術品目録』		
「相見香雨自筆調査録」7-2	1923年 6～12月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」7-3	1923年12月～1924年 2月	九州大学文学部蔵
『罹災美術品目録』（国華倶楽部）	1933年	筑波大学中央図書館蔵

題名	年代	所蔵者
2. 「相見香雨自筆調査録」の全容		
「相見香雨自筆調査録」全42帙	1909年8月～1967年7月	九州大学文学部蔵
3. 相見香雨の著作		
「審美書院出版物の英国人に与へたるインプレッションの一例」『美術之日本』2-11	1910年	個人蔵
『雲州餘彩』上・下（芸海社）	1922年	島根県立美術館蔵
「岡崎氏所蔵元信山水圖屏風に就いて」『島根評論』12-1	1935年	島根大学附属図書館蔵
「宗達の仙仏画と「仙仏奇踪」」『大和文華』8	1952年	島根県立美術館蔵
「深江蘆舟の墳墓発見をめぐる」『大和文華』31	1959年	島根県立美術館蔵
『飛鳥山房十友』（大塚巧藝社）	1962年	島根県立美術館蔵
『相見香雨全集』全5巻（青裳堂書店）	1985～1998年	島根大学附属図書館蔵
資料パネル—松江から見た相見香雨		
「相見香雨翁を語る（上）（中）（下）」『島根新聞』	1962年7月21～23日	原本：島根県立図書館郷土資料室蔵
相見香雨年譜・著作一覧		桑原相見研究会作成
参考展示		
山内長三編「相見香雨翁回想録 その2」『古美術』20号	1967年	個人蔵
関高子遺稿集『婦人解放の大河に生きて』（私家版）	1991年	個人蔵
森山時雄著『一老美術史家・相見香雨の回想』（私家版）	1985年	島根大学附属図書館蔵
ディスプレイ		
「相見香雨自筆調査録」デジタル画像		桑原相見研究会撮影